

〈細民〉としての子ども

——樋口一葉の小説を視座に——

菅 聡子

みなさんこんにちは。お茶の水女子大学の菅聡子です。今日は、「格差社会と文学—弱きものとしての子ども」ということで、樋口一葉の小説を視座としながら、とくに〈細民〉という表象の観点からお話ししたいと思います。

その前提としてまず確認しておきたいのは、〈細民〉とは徹底的に表象される存在であるということです。山田有策氏は「『細民』の文学」（『国文学』1988・6）で、「細民」が言語の主体となることは絶対にあり得ない、その意味で、細民「の」文学というものは存在しない、ということを描き出されています。たとえば、私なども一葉文学について講座などで話すときは、「一葉は、明治社会の下層を生き残った弱者たちの沈黙の声を代弁した」という言い方をよくします。しかし、この沈黙に閉ざされた者たちを「代弁する」という行為、これ自体がすでに一つの権力であり支配であることは、たとえ自ら極貧を生き残った一葉であっても、考慮すべき事柄だと思っています。弱者の「代弁」あるいは「翻訳」という行為が、ときに支配であり、ときに暴力となる。言語の所有者はその時点でひとつの権力と成りうるということであり、言葉の主体であることが必然的にある優位性を生じさせることを忘れてはならないと思います。

さらに、著者不詳「府下貧民の真況」（『朝野新聞』明治19・3～4、中川清編『明治東京下層生活誌』所収）からわかることは、「細民としての子ども」と言っても、そもそも、アリエス風「子ども」としての時間を持つこと自体がひとつの特権であるということです。「貧民窟」と呼ばれる場所にいる彼らは、ロマン化された子ども像とは全く違う生を生きている。つまり、子どもであることができる、と言うこと自体がひとつの特権なわけですが、同時に、近代の規範が内面化されるとともに、子どもであることも制度化されることとなります。

そして、河島修『福祉史を歩く 東京・明治』（日本エディタースクール出版部、2006・5）にあるように、「細民」という語が、「貧民」「細民」「窮民」という順序で、下層民の階層を示しているということです。すなわち、社会の下層民と名指される者たちがさらに、階層化されているということです。種々のルポルタージュに明らかなように、彼らは〈細民〉なるものを発見し、それを観察し、報告するわけですが、この用語の使い分けが示すように、それは同時にラベリング行為であり、名付けられることで彼らは「野蛮」で「不潔」で人間とは思えない〈細民〉となります。ことに、さらに弱者である子どもであるならなおさらです。

そして何より、こうして「細民」の表象を見出し、何かコメントしようとする研究主体としての私自身が何より権力的である、ということを重ねて自覚したうえで、今日の発表に入りたいと思います。ここからは特段のエクスキューズなしでお話しすることをお許しいただきたいと思っています。

ここで一枚、絵をごらんいただきたいと思います。この絵は、『風俗画報』の臨時創刊、明治

36年の「新撰東京名所図絵」のうち、「四谷区乃部」にある「鮫河橋貧家の夕」という貧民層を描いた絵です。

この鮫河橋という場所は、東京の非常によく知られた貧民窟です。描かれている子どもたちのうち、男の子たちがネズミをぶら下げています。これは当時ペストの予防のために、ネズミをつかまえると東京市から5銭が与えられた。それでネズミをつかまえたこの子たちが喜んでいる、そういう姿です。

この絵は明治36年のものですが、今日取り上げる樋口一葉の作品は、明治20年代の終わりに書かれています。樋口一葉の作品は、その女性像が注目され中心化されて論じられることが多いのですが、同時に、どの作品にも、子どもたち、それも貧しさのなかを生きる子どもたちの姿が書き込まれています。それらについて、同時代がそのような子どもたちに注いだ視線を参照しつつ、追跡したいと思います。そして、〈細民〉たちが多くのルポルタージュ等によって他者として表象されたように、一葉作品の子どもたちもまた、近代的孩子の規範とどのように交錯し、また排除されているのか、その一端を見てみたいと思います。

たとえば、一葉が下谷龍泉寺町、彼女が言うところの「塵の中」に移り住み、そしてその地を去る寸前に書いた、一葉の作家歴においては彼女の一種の「再生」の作と位置づけられる『琴の音』（『文学界』1893・12）という作品では、幼いときに母に捨てられ、また父にも死なれて孤児になってしまった渡辺金吾という少年が登場しますが、引用に示しました彼に向けられる周囲のまなざし、すなわち孤児である彼が掏摸や盗賊の疑いをかけられる、きっと掏摸であるに違いない、といったまなざしは、橋本陽子「犯罪防止と児童保護」（『ソシオロジ』2004・10）にある同時代の動きと呼応しています。「孤児・棄児」がその境遇ゆえに金吾のような外貌をもつ、そこに人々は「貧民窟」の属性である「野蛮」「不潔」という外部を見出していくわけですが、それがさらに、将来の「犯罪」の根拠としてその子どもの未来像までも規定されていくわけです。

また、明治20年代は、古くからの「イエ」制度が、近代的家父長制度へと再編成され、そのプロセスのなかで、従来「イエ」とは対立する、新しい概念として輸入された「家庭」という概念もその近代的家父長制度へと回収され、「家族」という共同体が強化されていくことを背景に、「孤児・棄児」が、家族制度から放逐された者としてのスティグマを背負うことがわかります。あとでご紹介する『わかれ道』という作品で、捨て子であった吉三が自分の出自に固執する背景には、このような家族概念の確立があるわけです。

さて、さきほど、近代の規範が内面化されるとともに、子どもであることも制度化されると申しましたが、このことをもっとも示すのは言うまでもなく、学校制度の成立です。一葉作品において、この学校制度がどのような抑圧として機能するか、それを見る前に、まず、「教育」という新しい価値観による新たな排除の構図について、教育小説と銘打つ作品で確認したいと思います。

『東京新繁昌記』で知られる服部撫松が明治20年に発表した、「教育小説」という角書きをもつ『稚児桜』（1887・6）という作品を見てみましょう。ストーリーのあらまは、各回の題を見ただけでわかりますが、これはあからさまなプロパガンダ小説で、教育の価値を称揚し、教育がいかに立身出世の道を開くか、を物語化したものです。

極貧の子・清蔵はお約束通り、学問による立身出世をとげ、留学して法律博士となり、東京

始審裁判所の検事になるのですが、勤勉家なのは彼だけではなく、彼をとりまく子どもたちは、明治政府の教えの通り、教育の大切さを認識し、勉強して出世しようとする者たちと、その新しい価値観をまったく受けいれず、馬鹿にし、怠惰に暮らす者たちに二分され、当然のことながら、後者は女の子は芸者に、男の子は犯罪者になる。そのなかで、「己等ハ建具屋なんざア厭なこつた阿爺さんもネ建具屋にならなくつても好いから勉強をしろつて云つてるよ建具屋なんぞの様な職工人になつてネ何にも知らないとネ下等人民だなんかと人に看縊られるからサ己等ハネ学問をして上等社会の人になつてネ、ヲイ屹度馬車に乗つて行つて看せるよ」のように、あからさまな職業差別の視線が生まれています。教育の有無が、人間の上等・下等をわける新しいそして抑圧的な評価軸として、まず子どもたちの世界に侵入しています。

『たけくらべ』でもよく知られた場面、長吉が信如を仲間に引き入れようと説得するとき、田中の正太郎が公立学校だといっていばり、自分たち私立学校を馬鹿にする、とくやしがり、信如の最大の武器は学問ができるから、漢語で喧嘩が出来る、といってスカウトしようとする。ここにも子どもたちの世界に、従来とは異なる、つまり昔なら、喧嘩が強かったり水泳ぎが得意だったりすればそれで大将でいられたわけですが、それとは異なる評価軸が成立していることがわかります。

すなわち、教育という新しい価値観の内面化・規範化は、新たな排除の視線を生じさせるわけですが、一葉作品においては、教育をめぐる価値観は、どんなに貧しくとも、学校に行かせなければならない、という形であらわれます。立身出世の幻想が庶民にも行き渡ったことの証左でもあり、本来、子どもにとっての権利である就学が、一方で、オブセッションとして機能し、その両面の葛藤が一葉作品のドラマを生んでいます。

たとえば、『大つごもり』（1894・12）では、ヒロインお峯の伯父の家は、極貧の身に落ちてでも、学校教育を無上の価値としています。「学校は好きにも好きにも」「先生様にもほめ物の子」である八歳の三之助、出世前の彼に正月の餅を食べさせるため、伯父はお峯に給金の前借りをねだり、その結果、お峯は盗みをすることになるのです。「五厘学校」は実際に下層民の子を対象にした学校ですが、井村圭壮・藤原正範編『日本社会福祉史』（勁草書房、2007）安岡憲彦『近代東京の下層社会 社会事業の展開』（明石書店、1999）は、一般に「貧民学校」と呼ばれた、特殊尋常小学校について紹介しています。時間の関係で、詳細ははぶき、結論のみ申し上げますと、このような特殊尋常小学校の意図のひとつに、貧困児童を良質の労働力に陶冶し、大日本帝国の臣民に造形しようとするものが指摘されています。大正の終わり、この学校は廃止され、地域の小学校に組み込まれますが、その理由の一つに、出身校に対する差別意識があげられています。

いちど貧困の階級に生まれると、それはいつまでもさまざまな形でスティグマとなって彼らにつきまとう。学問による立身出世の幻想と、貧困階級から抜け出すことは不可能という現実と、その双方を描き出していくところが、一葉作品の時代に対する現実認識です。そのような一葉作品において、「学校」という制度の意味がもっとも可視化されているのは、言うまでもなく『たけくらべ』（1895・1～1896・1、断続掲載）です。さきにふれたように、子どもたちの日常に侵入した新しい、そして明治新政府、明治近代という権威に裏打ちされた価値観、という点においてでもあります。同時に、この作品の子どもたちにおいて、「学校教育」というものは実

は何の意味も持っていない、という点においてもです。

学校に行こうが行くまいが、美登利が将来娼妓になり、正太郎が質屋になり、長吉が鳶の頭になり、信如が僧侶になり、そして三五郎が貧民のまま、という彼らの将来像はまったく変わらないのです。

また、人口に膾炙した前田愛氏による「子どもたちの時間—『たけくらべ』試論」(『樋口一葉の世界』平凡社選書、1979)によって、『たけくらべ』が子どもたちの物語である、ということもやはり、自明のこととして共有されています。しかし、「子どもたち」として彼らを一元化していいものでしょうか。もちろん、前田氏も単純に彼らをひとくくりにしたわけではなく、とくに「異質な子ども」としての美登利に「流民の血」を見出し、その遊芸性から、三五郎へとつなげてらっしゃいます。

しかし、私が思いますに、美登利と三五郎の共通性、そして他の子どもたちとの異質性とは、彼ら二人だけが「細民」の子どもだということではないでしょうか。美登利が「細民」あるいは「貧民」の子であるかもしれない、ということは、テキストの現在では表面化しません。むしろ、贅沢三昧に暮らしている子どもです。しかし、「姉なる人が身売りの当時、鑑定に来たりし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此訳、それより奥は何なれや」とありますように、美登利の一家は、故郷の和歌山で娘を遊廓に売り飛ばすほどに食い詰めたわけですから。そもそも、日清戦争以降、「細民」の数が一気にふえたのは、地方農村の疲弊によります。もちろん、美登利の家が何を生業としていたかはわかりませんが、いま、父親が遊廓の「小格子の書記」をしていることを考えると、読み書き計算ができるわけですから、商人か、あるいは没落士族であったのかもしれませんが、しかし、娘を遊廓に売り飛ばすわけですから、彼らの生活の実態が「貧窮民」であったことは確かでしょう。

しかしテキストの現在において、美登利は言うまでもなく「細民」ではありません。それはなぜか。言うまでもなく、「ただし東京は女性の最も高価なる邦柄なり、氏なき者の最も多く瑤輿の上に乗る処なり。普通なる下層の社会が已に男子を生むを重んぜず、女子を生むことを重んずれば下層の下層はなおさらならん」(桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』1891)ともありますように、それは子どもたちが「女の子」だったから、それも上玉の姉妹だったからです。しかしこの点も含めて、美登利はまさに貧民の女兒の運命をたどっているのです。

一方、前田氏は「子どもたちの時間」を「アソビ」の相においてとらえられましたが、実際、三五郎の日常の時間のほとんどは、「十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へも通ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つゝかず、一ト月と同じ職もなく霜月より春にかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手伝ひして、呼声をかくく客を引くに上手なれば、人には調法がられぬ、去歳は仁和賀の台曳に出しより、友達いやしがりて万年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎む物の無きも一徳なりし」「今朝も三公の家へ取に行つたら、奴め身体が痛いくせに、親父に知らすまいとして働いて居た」「罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居もくるしく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなと見知りの台屋に咎められしほどなりしが、(中略)三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場処の直ると共にその恨めしさもいつしか忘れて、頭の家の子守りをして二銭が駄賃を

嬉しがり、ねんねん¹⁾よ、おころりよ、と背負ひあるく」とくり返し語られていますように、労働に占められています。彼にとって、「アソビ」の時間はまさに文字通り「余暇」なのです。そして、子どものころから労働に携わる彼の日々は、こののち、大人になってもそのままでしょう。貧民の子として生まれた運命を変えることはできない、それをさらに中心化しているのが『にぎりえ』（1895）です。

この作品ほど、「細民」の子どもとして生まれるということが何を意味するか、鋭く描いたものはないでしょう。『にぎりえ』においては、多く、お力と源七、またお初といった名前を与えられた登場人物たちが中心化して論じられますが、同時に、お力の朋輩たち、酌婦仲間たちの嘆きが、無数の下層の身を売る女たちの声を響かせています。ここに登場する酌婦たちの母子関係は、まさに貧民の子のそれであり、また、名前を与えられた存在としては、源七の長男で幼い太吉、そして誰よりも、子ども時代のお力の姿が「細民」の子どもとは何者か、を語っています。

『にぎりえ』において、もっとも印象的なエピソードは、お力の子ども時代の回想でしょう。少し長くなりますが、引用しておきます。

私の父といふは三つの歳に櫓から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへましたれど、気位たかくて人愛のなければ最頂にしてくれる人もなく、あゝ私が覚えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古浴衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物の工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に去る物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手握つて米屋の門までは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて手も足も亀かみたれば五六軒隔てし溝板の上の水にすべり、足溜りなく転げる機会に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざらざら²⁾と翻れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落としましたと空の味噌こしさげて家には帰られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買ってやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近処に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひましたろ、話しは誠の百分の一、私は其頃から気が狂つたのでござんす。

一家の命をつなぐ白米がざらざらと溝板のすきまから泥の中へとこぼれ落ちてゆく、この場面で七歳のお力の視線は溝泥の底なき底を、つまり下方を見えています。この絶望は、物語の現在時においては、もう一人の「細民」の子、太吉のカステラのエピソードに重ねられます。黄金色の「日の出屋がかすていら」、溝泥にまみれたそれは、記憶の起源として太吉のなかに生き続けるでしょうし、彼の場合、自分がもらったカステラが原因で両親が離婚し、さらにそのあと父が無理心中をとげたとなれば、そのトラウマははかりしれない。お力の子ども時代の絶望は、そのまま、もう一人の「細民」の子である太吉において反復されるのです。

お力はこの「にぎりえ」から抜け出たいと思っていますが、しかし、だからと言って人の女房になったり、囲われたり、つまり所有されることによって結城の言う「出世」をすることは

できない、それは受けいれられない、しかし一方、祖父以来の恨みを晴らす手段もない、そこで、「にごりえ」論では「菊の井のお力を通していく」という主体的選択をしたのだ、と論じられることが多いのですが、私が思いますに、お力の最大の悲劇は、彼女が自己実現を果たそうと思ってもそれができない、その理由が、極貧の家に育ち、いままた社会の底辺を生きる彼女には、そもそも何があるべき姿なのか、その自己実現の具体的なビジョンそれ自体を構築することができない、そこにあると思います。これが彼女における最大の不幸であり最大の疎外です。

酌婦として生きること、それは決して自分の望みではない。しかしこの生活から抜け出すために男の世話になること、それもまた望みではない。しかし、それ以外の脱出の方法、可能性というものそれ自体をお力とはまったくイメージすることができないのです。これが「にごりえ」を生きる者の姿です。

お力の「履歴」については、結城だけではなく、研究者たちの関心も寄せられてきましたが、私見では、問題とされるべきは、彼女の語られていない少女時代のはずです。こぼれ落ちる米のエピソード、これは実に印象的です。しかしこの記憶を、少なくとも彼女は言語化することができた。では、両親の死後、一人極貧のなかに残された美貌の少女の運命はどのようなものだったのでしょうか。世話してくれる親戚も知り合いもない。自らの身体を「商品」とせざるを得なかった女の子としてのお力の日々は、はたして彼女が何歳の時から始まったのでしょうか。

「にごりえ」に生まれた者は「にごりえ」に死ぬしかない。「にごりえ」の生は反復され、明治社会の「暗黒」を形成する。そしていま、この生のサイクルに、太吉もまたいるのです。『にごりえ』という作品は、細民や娼婦をロマン化する視線への反措定であり、厳しい拒絶にはかならないと思います。

さて、最後に、「子ども」と「国民」の交差を示すものとして『わかれ道』（1896・1）をとりあげたいと思います。

吉三は「新網」出身で、角兵衛獅子をしていたところを、傘屋の肝っ玉婆さんによって拾われ、いま、職人として奉公中です。彼は実年齢は一六歳ですが、見た目は、つまり身体的には十一歳に見える。

この実年齢と身体的年齢の屈折が、吉三の存在をまさに「子ども」であるとは、「大人」であるとはどのように判断されるのか、その近代的規範を考えさせるものとなっています。この屈折は、彼の日常においては、ひとまず、残酷な差別の視線として可視化されています。「何時となく心安く、お京さんお京さんとして入るを職人ども翻弄ては帯屋の大將のあちらこちら、桂川の幕が出る時はお半の背中に長右衛門と唱はせて彼の帯の上へちよこなんと乗つて出るか、此奴は好いお茶番だと笑はれる」という叙述は、彼が「恋愛」の言説から疎外されることを示し、また「お気の毒様なこつたが独活の大木は役に立、ない、山椒は小粒で珍重されると高い事をいふに、此野郎めと背を酷く打たれて、有がたう御座いますと済まして行く顔つきに背さへあれば人申談とて免すまじけれど、一寸法師の生意気と爪はぢきして好い鬨りものに烟草休みの話しの種成き」は、普通なら喧嘩になるところを、彼の身体性、すなわち「見た目は十一歳」であるゆえに、その相手にもされないという男同士の関係性からの疎外を示しています。貧民窟の角兵衛獅子、そのような子どもであった彼は、言うまでもなく学校教育からも排除されていたはずで、そして何より「捨て子」であったということから、「家族」制度からも排除され

〈細民〉としての子ども（菅）

ている。そのような彼を、さらに疎外する新たな基準は、まさに近代によってもたらされます。

『わかれ道』が発表されたのは明治29年1月、執筆が28年12月、すなわち日清戦争直後です。ここで侵入してくるもう一つの「国民」、男性をはかる規範、それは徴兵令です。「改正徴兵令」（1889改正）を参照すれば、現在数えて十六歳、満年齢ではおそらく十五歳あたりと思われる吉三において、徴兵令は目前にせまる規範です。しかし、年齢を満たしても、彼の身体はおそらく、この規定、すなわち「第十八条 左ニ掲グル者ハ徴集ヲ延期ス。次年ニ於テナホ徴集ニ適セザル者ハ国民兵役ニ服セシム。第一 体格完全且強壯ナルモ、身幹未ダ定尺ニ滿タザル者。」に抵触するのではないのでしょうか。そうするとここで彼は、さらに「国民」からも排除されることとなります。彼の「子ども」時代はいつ終わるのでしょうか。

さて、ここまで断片的に、一葉作品にあらわれた「貧しい子どもたち」をとりあげつつ、そこに可視化される近代の規範とそれによる抑圧、疎外を見てきました。実は、とくに結論は用意していません。私たちは、表象としての「子ども」を何らかの視線、すなわちバイアスを介してしか受容することはできません。そのことに自覚的になり、それを担保にしながら、しかし、表象としての「子ども」がどのように規定され、どのような価値基準によってあるべき／あるべからざる子どもとして語られるのか、その基準や規範を見出すことによってしか、格差社会における「子ども」の問題に迫ることはできないでしょう。

一葉作品が描き出しているのは、まさに国民国家としての自己形成を続けていた明治近代の子どもたちですが、こののち、さらに近代的孩子像、ロマン化された子ども像がより一般に内面化されていく時代の流れのなかで、子どもたちと貧困、労働、さまざまな疎外といったものがどのように語られるのかは、あとのお二人のご発表によって明らかにされるかと思えますので、はなはだまとまりに欠けましたが、ここでひとまず、私の話を終えさせていただきたいと思えます。

注

- 1) 原文は踊り字。
- 2) 原文は踊り字。